３　　年　齢　構　造

（１）　年齢３区分別人口

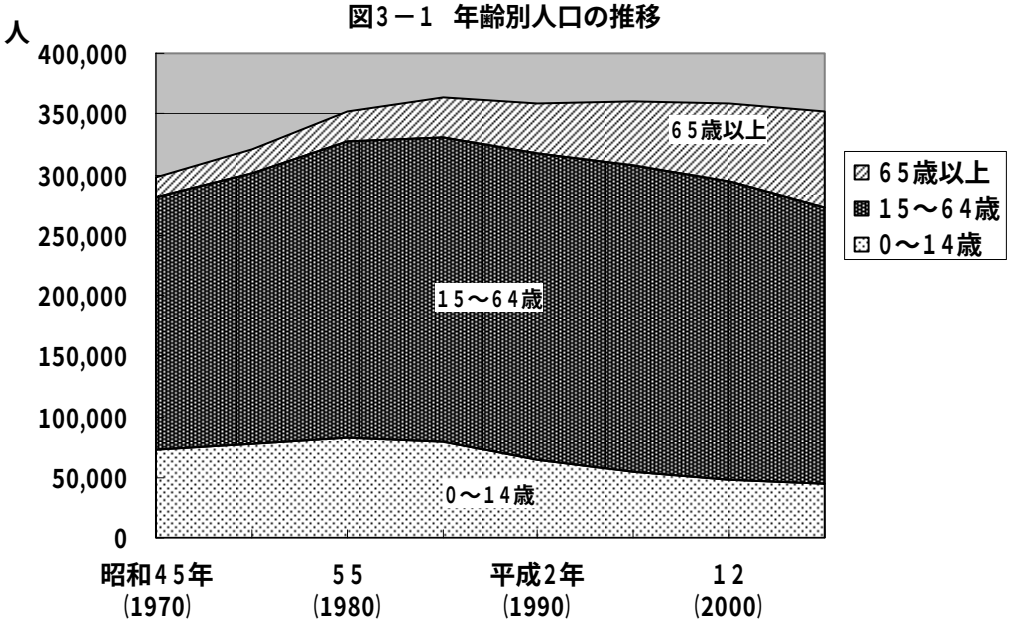
～　総人口の 22.2%を占める老年人口　少子高齢社会到来　～

旭川市の人口を年齢３区分別にみると，0～14 歳が 44,177 人，15～64 歳が 228,860 人，65 歳以上が 78,781 人となっており，構成比ではそれぞれ 12.4%，64.5%，22.2%を占めている。

老年人口（65 歳以上人口）は，昭和４５年には 15,697 人であったが，その後急速に増加を続け, 今回初めて７万人を突破し, 78,781 人と昭和４５年と比べて約５倍の増加を示している。総人口に占める割合をみても，昭和４５年の 5.3%から今回の 22.2%と急速に高齢化が進行している。

全国的な傾向として人口の急速な高齢化は，低出生率と低死亡率を主因に，今後も一層進行していくと予測できる。（図３－１，表３－１）

図3－1　年齢別人口の推移



～　年少人口・生産年齢人口共に低下　～

年少人口（０～１４歳人口）は，昭和４５年には 72,222 人で総人口に占める割合は 24.3%を占めていたが, その後, 総人口に占める割合は減少を続け, 平成１７年では 44,177 人で 12.4%となり，10 ポイント以上と大きく低下している。

特に５年間の増減率をみてみると, 年少人口は, 平成２年の 17.2%減, 平成７年の 15.1%減, 平成１２年の 11.9%減，平成１７年の 9.2%減と低下しており，前回初めて総人口に占める割合で，老年人口が年少人口を上回り，今回はその差がさらに広がった。

生産年齢人口については, 昭和４５年には 209,270 人で総人口の 70.4%を占めていたがその後, 平成２年に 482 人減少したのを除き増加を続けてきた。しかし, 前回調査から減少に転じ, 今回も 15,957 人と大きく減少した。また, 総人口に占める生産年齢人口の割合は, 総じて 70%前後を保ってきたものの，今回 65%の壁を割り込み，今後も出生数の低下と雇用情勢の動きにより，減少要因が強いことが予測される。（表３－１，表３－２）

表３－１　年齢（３区分）別人口推移
単位：人，％

年次	人口				構成比			
	総数	0～14 歳	15～64 歳	65 歳以上	総数	0～14 歳	15～64 歳	65 歳以上
昭和４５年(1970)	297,189	72,222	209,270	15,697	100.0	24.3	70.4	5.3
５０　(1975)	320,526	78,347	221,992	20,165	100.0	24.4	69.3	6.3
５５　(1980)	352,619	82,610	243,971	26,003	100.0	23.4	69.2	7.4
６０　(1985)	363,631	78,570	252,316	32,683	100.0	21.6	69.4	9.0
平成　２年(1990)	359,071	65,064	251,834	41,618	100.0	18.1	70.1	11.6
７　(1995)	360,568	55,253	251,929	53,211	100.0	15.3	69.9	14.8
１２　(2000)	359,536	48,670	244,817	65,866	100.0	13.5	68.1	18.3
１７　(2005)	355,004	44,177	228,860	78,781	100.0	12.4	64.5	22.2

注　年齢別人口は，年齢不詳を除いているため総数が一致しない。

表３－２　年齢（３区分）別人口増減の推移
単位：人，％

年次	５年間の増減数				５年間の増減率			
	総数	0~14 歳	15~64 歳	65 歳以上	総数	0~14 歳	15~64 歳	65 歳以上
昭和４５年(1970)	25,259	2,037	19,691	3,531	9.3	2.9	10.4	29.0
５０　(1975)	23,337	6,125	12,722	4,468	7.9	8.5	6.1	28.5
５５　(1980)	32,093	4,263	21,979	5,816	10.0	5.4	9.9	28.8
６０　(1985)	11,012	△ 4,040	8,345	6,680	3.1	△ 4.9	3.4	25.7
平成　２年(1990)	△ 4,560	△ 13,506	△ 482	8,935	△ 1.3	△ 17.2	△ 0.2	27.3
７　(1995)	1,497	△ 9,811	95	11,593	0.4	△ 15.1	0.0	27.9
１２　(2000)	△ 1,032	△ 6,583	△ 7,112	12,655	△ 0.3	△ 11.9	△ 2.8	23.8
１７　(2005)	△ 4,532	△ 4,493	△ 15,957	12,915	△ 1.3	△ 9.2	△ 6.5	19.6

（２）　年齢構造指数

～　老年化指数が 150 を大きく越えた　～

人口の年齢構造を簡潔に表す指標として用いられる「年少人口指数」（生産年齢人口に対する年少人口比率），「老年人口指数」（生産年齢人口に対する老年人口比率），「従属人口指数」（生産年齢人口に対する年少人口と老年人口の和の比率），「老年化指数」（年少人口に対する老年人口比率）がある。

＜算式＞

年少人口指数＝０～１４歳人口／１５～６４歳人口×１００
老年人口指数＝６５歳以上人口／１５～６４歳人口×１００
従属人口指数＝（０～１４歳人口＋６５歳以上人口）／１５～６４歳人口×１００
老 年 化 指 数＝６５歳以上人口／０～１４歳人口×１００

それぞれの指数の推移をみてみると，年少人口指数は昭和４５年 34.5%あったが，その後，低出生数を反映して，減少傾向にあり 19.3%まで低下した。

一方，老年人口指数は昭和５０年まで 10%を割っていたが，その後次第に上昇し，今回 30%を超え 34.4%となった。

次に，年少者及び高齢者を扶養する負担度をみる従属人口指数をみると，平成１２年まで 40%台で横ばい状態にあったが，今回 53.7%と増加傾向にあり，老年人口の増加が大きく影響している。

最後に老年化指数をみてみると，昭和４５年の 21.7%から今回 178.3%まで上昇の一途をたどっている。平成１２年から 100%を越え，平成１７年は 178.3%と大幅に増加した。つまり６５歳以上の人口が０～１４歳の人口を大きく上回ったことを意味し，高齢化が急速に進んでいる。（表３－３）

図3－2　年齢構造指数の推移

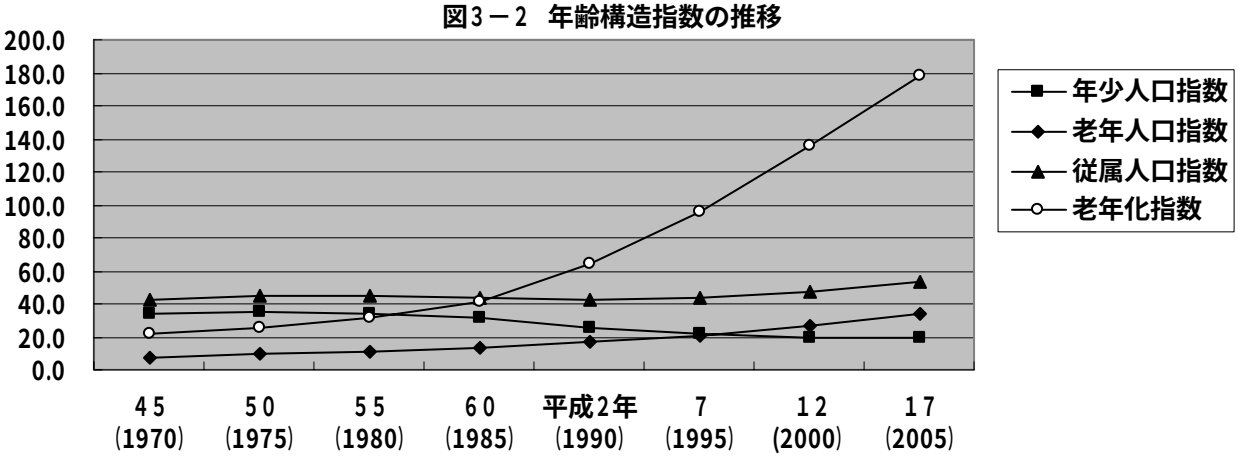


表３－３　年齢構造指数の推移

年次	年少人口指数	老年人口指数	従属人口指数	老年化指数
昭和４５　(1970)	34.5	7.5	42.0	21.7
５０　(1975)	35.3	9.1	44.4	25.7
５５　(1980)	33.9	10.7	44.5	31.5
６０　(1985)	31.1	13.0	44.1	41.6
平成　２年(1990)	25.8	16.5	42.4	64.0
７　(1995)	21.9	21.1	43.1	96.3
１２　(2000)	19.9	26.9	46.8	135.3
１７　(2005)	19.3	34.4	53.7	178.3

（3）　年齢（５歳階級）別人口

～　年齢構造の２極化がはっきりと　～

年齢構造の分布をみていくと，０～１４歳のいわゆる年少人口は昭和４５年総じて７～８％台であったが，今回３～４％台と約半分の数値まで落ちていることが解る。

一方，６５歳以上のいわゆる老年人口は昭和４５年に 5.3%であったが，今回 22.4%と４倍強に跳ね上がっている。（表３－４）

表３－４　年齢（５歳階級）別人口の推移
単位：％

年齢	昭和 45 年 (1970)	50 (1975)	55 (1980)	60 (1985)	平成 2 年 (1990)	7 (1995)	12 (2000)	17 (2005)
総　数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
0~4 歳	8.7	8.9	7.4	6.1	5.0	4.3	4.1	3.9
5~9	8.1	8.1	8.4	7.2	6.0	5.0	4.4	4.1
10~14	7.5	7.5	7.6	8.3	7.1	6.0	5.1	4.5
15~19	9.9	7.5	7.4	7.4	7.9	7.0	5.9	5.0
20~24	10.7	8.3	7.0	6.6	6.5	7.0	6.2	5.0
25~29	9.3	10.4	8.5	6.6	6.1	6.3	7.0	5.9
30~34	8.7	8.7	10.0	8.1	6.4	6.0	6.2	6.7
35~39	8.2	7.9	8.1	9.5	7.9	6.3	6.1	6.1
40~44	7.0	7.5	7.3	7.8	9.3	7.9	6.4	6.1
45~49	5.4	6.4	6.8	6.9	7.5	9.1	7.7	6.3
50~54	4.4	5.0	5.8	6.4	6.7	7.3	8.9	7.7
55~59	3.8	4.1	4.7	5.6	6.4	6.6	7.2	8.9
60~64	3.0	3.4	3.6	4.5	5.5	6.3	6.6	7.3
65 歳以上	5.3	6.3	7.4	9.0	11.6	14.8	18.3	22.4

次に，調査年次から５年間隔で年齢区分も５歳階級であることから，同時期に出生した人口集団（出生コーホート）の時間的経過をみてみると，平成１２年比で今回１０～１４歳はわずかに増加したものの，０～９歳，１５～６４歳まで減少している。また，６５歳以上は大きく増加しており，高齢化が進んでいる。

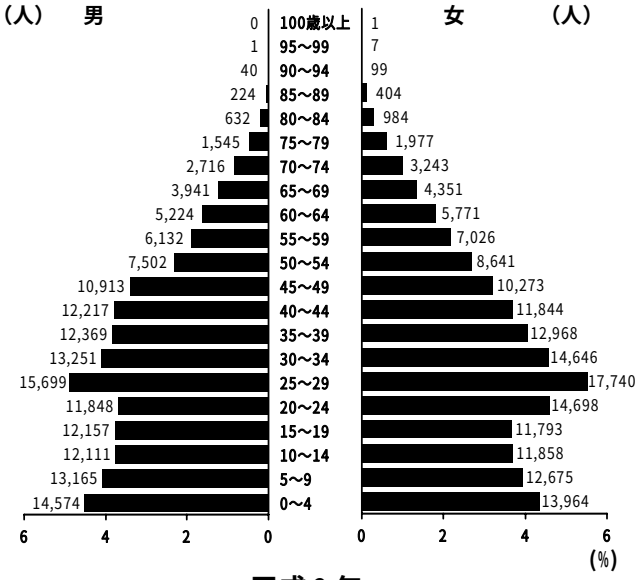
また，人口の年齢構成を男女別・年齢別に端的に表すものとして人口ピラミットがある。

旭川市の人口ピラミットは，昭和５０年には，すそがわずかに広がった「星形」となった。

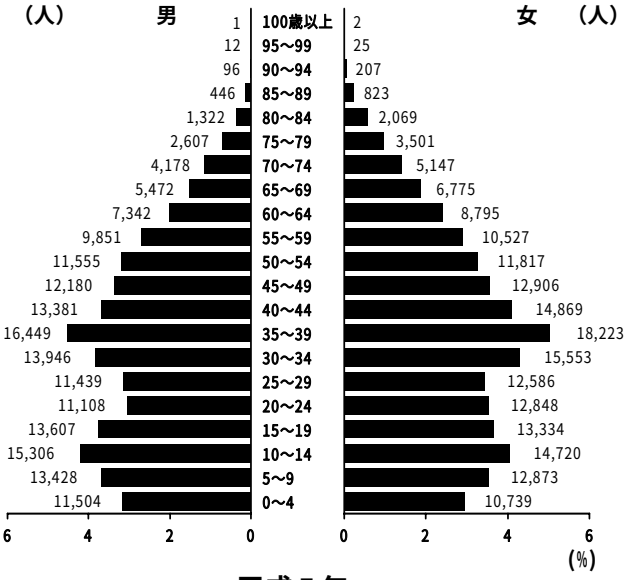
その後，昭和５５年から出生数が徐々に減少に転じ，昭和６０年，平成２年，平成７年，平成１２年そして今回と「ひょうたん型」となっている。（図３－３）

図3－3　旭川市の人口ピラミット　※年齢不詳者は含めず

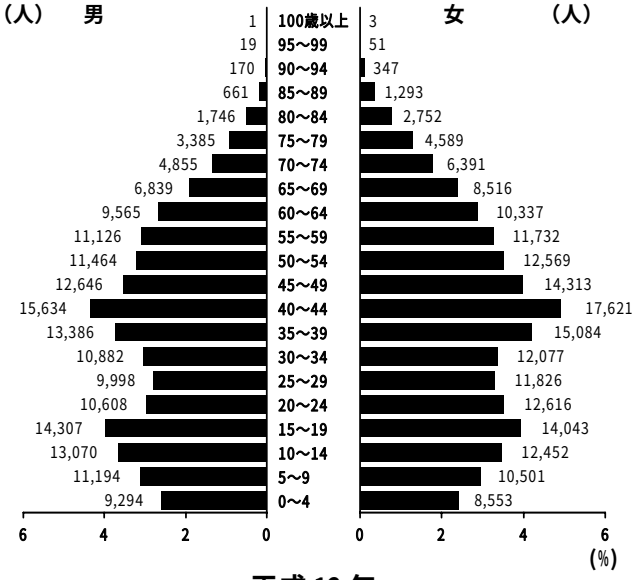
昭和 50 年



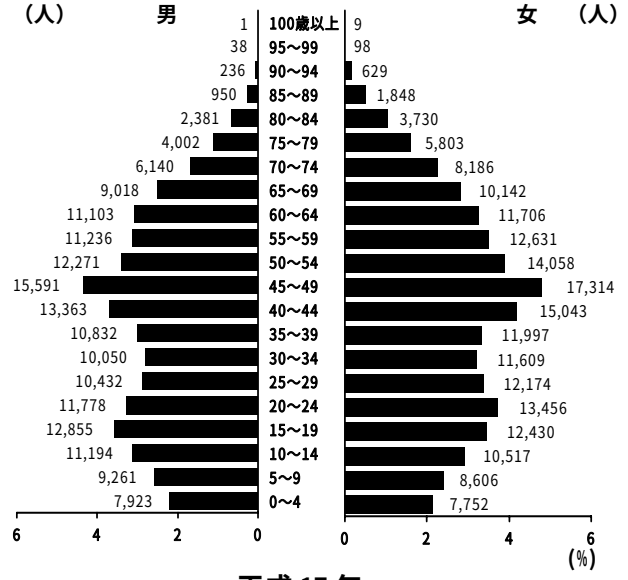
昭和 60 年



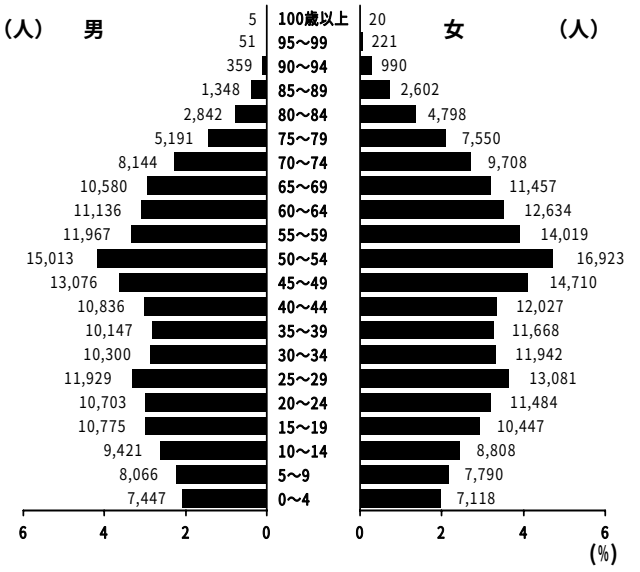
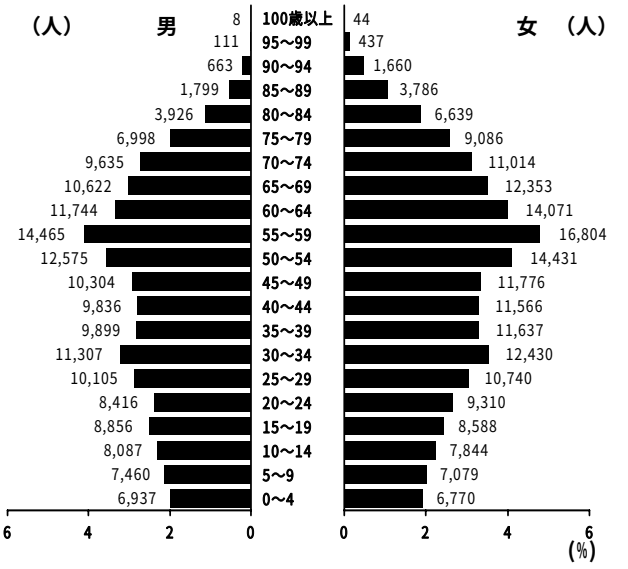
平成 2 年



平成 7 年



平成 12 年



平成 17 年